反宗教改革時代のユートピア

――カスパール・シュティブリンの『エウダイモン国見聞記』――

副　島　美由紀

1．ドイツ最初のユートピア小説

1553年夏，アルザス地方の小都市シュレットシュタット(Schlettstadt，現在のセレスタ Sélestat)に住む若きラテン語教師が，仕事の憂さ晴らしも兼ねてラテン語で架空の旅行記を書く。『エウダイモン人の国に関する短い報告(Commentariolus de Eudaemonensium Republica)』(以下『エウダイモン国見聞記』又は『見聞記』と略記) という表題を持つこの架空の見聞録は2年後の1555年にスイスのバーゼルで出版されている[1]。エウダイモンというのはマカリア島と呼ばれる島の首都の名で，エウダイモン市はギリシャのアテナイのような都市国家である。「エウダイモン」(εὐδαίμων)と「マカリア」(μακαρία) は共にギリシャ語で「幸福」及び「至福」を意味し，エウダイモン人たちの社会はその名の示す通り〝幸福な国家の完璧な模範[2]〟とも言うべき理想郷であり，この見聞録の著者は〝他の国々はすべてこの模範を見習うべし[3]〟という考えのもとに自分の見聞きしたエウダイモン市の社会制度について記憶にあるがままを書き記すのである。

---

[1] Stiblin, Kaspar, Coropaedia, sive de moribus et vita virginum sacrarum, libellus plane elegans, ac saluberrimis praeceptis refertus Gasparo Stiblino autore. euisdem, de Eudaemonensium Republica Commentariolus, Basel, 1555.

[2] Stiblin, Kaspar, Commentariolus de Eudaemonensium Republica (Basel 1555), Hrsg., übersetzt und kommentiert von Isabel-Dorothea Jahn, Regensburg, 1994, p.9.

[3] ibid., p.9.

実はヨーロッパの人文主義者(フマニスト)たちにとって「マカリア島」というのは未知の名ではなかった。トマス・モアは『ユートピア』の中で，ユートピア島の近隣にあり賢王の治める国としてマカリア人たちの島を紹介している。『エウダイモン国見聞記』は，『ユートピア』を既に読んでいたと推測されるドイツの若き人物主義者が，無可有郷についての記述という形式を借りて憂うべき現実を批判し，〝よりよい世界〟を想定して書いたユートピア小説である。年代的にはモアのそれに次ぐもの，またドイツ語圏においては最初のユートピア文学であるはずなのだが，イタリアの歴史学者，ルイジ・フィルポが1959年に再版し[4]，また1963にその論文[5]において著者であるカスパール・シュティブリンをユートピストの系譜に位置付けるまで，この『見聞記』は長く忘却されたままであった。ドイツにおける最初のユートピストという名誉は，一般的には『クリスティアノポリス』[6] (1619) を著したプロテスタント神学者にして薔薇十字団の中心的人物，ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ (Johann Valentin Andreae, 1586-1654) に帰するものとされている[7]。が，ようやく1994年になって『エウダイモン国見聞記』がドイツ語に翻訳され[8]，ドイツにおけるユートピア文学研究の空白の補塡が容易になってきた。

---

[4] Stiblin, Kaspar, De Eudaemonensium Republica, con una introduzione e la bibliografia dell'autore a cura di Luigi Firpo, Turin 1959 (=Monumenta politica rariora Series II Numerus 1).

[5] Firpo, Luigi, Kaspar Stiblin, utopiste, in: Les utopies a la Renaissance, Bruxelles, 1963, p.107-133.

[6] Andreae, Johann Valentin, Christianopolis, mit einem Lateinischen übersetzt, kommentiert und mit einem Nachwort hrsg. von Wolfgang Biesterfeld, Stuttgart, 1975.

[7] Andreae, Johann Valentin, Christianopolis 1619, Originaltext und Übertragung nach D.S. Georgi 1741; eingeleitet und herausgegeben von Richard van Dulmen, Stuttgart, 1972；江藤恭二『ドイツのこころ』，講談社，1980，p. 94；丸山純「J. V.アンドレアの理想都市論『クリスティアノポリス共和国についての記述』(1619年)の都市像について」，in：「日本建築学会論文報告集」第342号，1984，p.122。

[8] Stiblin, Kaspar, Commentariolus de Eudaemonensium Republica (Basel 1555), Hrsg., übersetzt und kommentiert von Isabel-Dorothea Jahn, Regensburg, 1994.

トマス・モアの記念碑的作品やフランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』など，代表的なユートピア文学を有する英文学や，カベーやディドロらの空想的航海記が存在するフランス文学と較べると，ドイツ文学史においては世に知られたユートピア文学は少ない。ルイス・マンフォードの紹介によって[9]知られるようになった『クリスティアノポリス』でさえ，カンパネッラによるほぼ同時代の作品『太陽の都』[10]と較べるとその知名度は低い。しかしカール・マンハイムが説くように，〝よりよい世界〟についての「虚偽意識」を伴った「存在を超越した表象」が方向付けの違いによってイデオロギー的意識ともユートピア的意識とも呼ばれ得るのであれば，宗教改革や『資本論』，J. ハーバーマスの「批判的公共性」など，ドイツの思想史は「存在を超越した表象」に実に富んでいる。ドイツ語圏におけるユートピア文学もそのような表象の系譜上に位置しているとすれば，文学ジャンルの一つと言えどもより広い歴史的・社会思想史的文脈において読まれるべきであろう。

以下の拙論は，ドイツ最初のユートピア文学と言うべき『エウダイモン国見聞記』の内容を紹介しながら，この作品が成立した時代の背景などを考慮しつつ知識社会学的な作品鑑賞を行う試みの一つである。

2．著者について

『エウダイモン国見聞記』の著者であるカスパール・シュティブリンは，1526年，アルゴイ地方の帝国自由都市ヴァンゲン（Wangen）に近いアムツェル（Amtzell）という村で生まれた。その生家については何も知られていないが，奨学金を頼りに学生生活を送った事実や，その後も給与の支払いに関する苦情を残していることなどから，決して裕福な生まれではなかったろうと推測されている[11]。フライブルクでギリシャ語，ヘブライ語，ギリシャ哲学・芸術

---

[9] ルイス・マンフォード『ユートピアの系譜』関裕三郎訳，新泉社，2000，p.78 ff。
[10] カンパネッラ『太陽の都』近藤恒一訳，岩波書店，1992。

などを学んだシュティブリンは，1549年にバカロレアを，また1550年にはマギスターを取得する。そしてこの頃には後に彼にとっての大作となるエウリピデスの戯曲の翻訳に着手している。1551年，シュティブリンはフライブルク大学の学芸学部でラテン語の文法教師として採用されるが，53年にはペストの難を逃れるためにフライブルク脱出を余儀なくされる。

彼が落ち着いた先はアルザス地方のシュレットシュタットで，そこで古典語学校のラテン語教師として職を得る。シュレットシュタットの古典語学校はかつては名門校として知られていたが，シュティブリンが赴任した頃，その名声はすでに凋落しつつあった。1525年，当時の校長がルターを擁護したために解任され，以来市の参事会は自由な精神活動を抑圧する方策に出た。教師の採用人事ではカトリック教義への帰依が重視されるようになり，寛容さを失った学校は不人気となって向学心のある若者たちは信仰の自由が存在するシュトラースブルクやバーゼルのギムナジウムへと移って行った[12]。学校は設備的にも給与の面でも理想とはほど遠い状況にあった。

『エウダイモン国見聞記』は1533年，シュティブリンがシュレットシュタットへ移住した最初の年に書かれているが，後述する通りその序文は彼が赴任してすぐ勤務に困難を感じていたことを伺わせる。また2年後の1555年，彼は次の著作として「娘たちの教育（Coropaedia）」という名の論考を著し，それを『エウダイモン国見聞記』と共に一冊の書物とし，バーゼルの著名な出版業者，ヨハネス・オポリーヌス（Johann Oporinus）の元で出版している。書物全体の表題ともなった『娘たちの教育』は家庭における少女たちの教育と女子修道院の理想的なあり方を描いた随筆で，アルザスはマスミュンスター（Massmünster，現在のマセヴォーMasevaux）の女子修道女院長，フォン・ファルケンシュタイン（von Falkenstein）に献じられている。この教育

---

[11] Jahn, Isabel-Drothea (Hrsg.), Kaspar Stiblin, Commentariolus de Eudaemonensium Republica (Basel 1555), Regensburg, 1994, p. XI.

[12] Jahn, ibid., p. XIV.

論を書き下ろした時，シュティブリン自身もまだ20代の若さではあったが，その内容は精神性と学問的営みに欠けた当時の修道院を批判したものと言われ，女性の資質も男性と同様，あるいはそれ以上に哲学的理念の学習に適しているという著者自身の考えから，若き尼僧たちに瞑想やラテン語による聖典の精読といった学問的修業を薦めている[13]。

『娘たちの教育』はシュティブリンにとって『エウダイモン国見聞記』より重要な作品であったと言われているが，彼が最も力を注いだのは学生時代から構想していたエウリピデスの全戯曲のラテン語訳であった。シュティブリンはシュレットシュタットに落ち着いてすぐこの翻訳作業に着手し，約10年後の1562年にやはりバーゼルのオポリーヌス社から『エウリピデス悲劇集』[14]として出版している。この試みはギリシャ語の原文とラテン語による対訳を併記し，それぞれの戯曲の筋書きとシュティブリンによる場面ごとの内容分析を付した意欲的なもので，当時の神聖ローマ皇帝フェルディナンドⅠ世に捧げられた。しかしこの意欲作は世の賞賛を浴びることはなかった。その年折り悪しく高名な人文主義者であるフィリップ・メランヒトン（Phillipp Melanchthon，1497-1560）によるエウリピデスの翻訳の新版がフランクフルトで出版され，シュティブリンの労作を二義的なものにした。130年ほど後のエウリピデス研究家によってもシュティブリンの翻訳は批判され，以降その評価が定着することになった[15]。恐らく『娘たちの教育』等の作品が顧みられなかったこともこの評価にも起因があると考えられる。

1559年，シュティブリンはかつて学生時代を過ごしたフライブルクのラテン語学校の校長として招かれ，アルザスを去る。そしてその2年後にはヴュルツブルクの領主司教によって新しく設立された学園の古典語および文学の

---

[13] Kytzler, Bernhard, Stiblins ‚Coropaedia‘, in : Jahrbuch für internationale Germanistik, Jahrg. 16 (1984), p.82-93.

[14] Stiblin, Kaspar, Euripides poeta tragicorum princeps in Latinum sermonem conversus adiecto eregione textu Graeco, cum annotationibus et praefationibus in omnes eius tragoedias, Basel, 1562.

[15] Jahn, ibid., p. XIX.

教師となってヴュルツブルクへ移住している。ヴュルツブルクでは1558年に，領主司教メルヒオール・フォン・ツォーベル（Melchior von Zobel）が政敵である貴族のヴィルヘルム・フォン・グルムバッハ（Wilhelm von Grumbach）によって暗殺されるという事件が起きている。シュティブリンはこの〝グルムバッハの抗争〟として知られる事件に関して領主司教を哀悼する2編の悲歌を作り，それぞれ1561年と1562年に出版しているが[16]，後者がシュティブリンの遺作となった。1563年前半には彼は死亡していたと言われているが，死因は不明である。この頃ヴュルツブルクではペストが猖獗を極めており，また63年にはヴュルツブルクの街が前述のフォン・グルムバッハによって襲撃・占領されていることから[17]，この擾乱あるいはペストのいずれかがシュティブリンの死と関係していたと推測され得る。いずれにせよこの若き人文主義者は早過ぎる死を迎え，その著作は殆ど顧みられることもなくヨーロッパのいくつかの図書館に眠ることになった。1994年に『エウダイモン国見聞記』のドイツ語訳を出版したイザベル-ドロテア・ヤーンは，この〝驚くべき学問的空白〟[18]を埋めるべく翻訳に着手したと序文に記している。以下においてはヤーンによるドイツ語版に依拠して『見聞記』の内容を紹介しつつ，その特徴を捉えてみたい。

---

[16] Stiblin, Kaspar, Ad Reverendissimum Principem Fridericum Herbipolensem episcopum: Satyra in sicarios Melchioris Zobelii. Casparo Stüblino auctore. Item elegia Conradi Dinneri Acroniani/ gewidmet Friedrich v. Wirsberg, [Bibl. Wolfenbüttel: Dillingen 1562, Sebald Mayer]); Stiblin, Kaspar, De caede Reverendissimi Principis et Domini Melchioris Zobelii carmen heroicum Caspari Stueblini, et Elegeia Conradi ad Joannem Aegolphum a Knoeringen/ gewidmet Friedrich v. Wirsberg (Basel, 1561.)

[17] Jahn, ibid., p.XXVI.

[18] Jahn, ibid., p.V.

3．『エウダイモン国見聞記』

3－1．航海の始まり

『エウダイモン国見聞記（Commentariolus de Eudaemonensium Republica：Kurzer Bericht über den Staat der Eudaimonenser）』は，マスミュンスターの修道院長でシュティブリンの学友でもあったヤーコプ・ブレンツ（Jakob Brenz）に対する献辞で始まっている。この1553年8月12日付の献辞は，友人に長期の音信不通を詫びつつマカリア島へ旅していたことを報告し，自分が見聞きした幸福な国についての記録を友情の印として友に贈る，という物語の枠組提示ともなっている。『ユートピア』の場合と違い，著者自身が理想郷への旅行を行ったという設定であるが，航海によってその地へ導かれたという点では共通している。シュティブリンは回想による見聞記を次のように始めている。（以降，本文中の頁数はヤーンによるドイツ語版中の頁を示す。）

> このところ学校勤めの厄介事に飽き飽きしていたが，この秋はずっと役職の義務から解放されることになったので，息抜きの目的と新しい分野に対する関心からアリストテレス，プラトンおよびクセノフォンの都市を眺めてみた。（中略）これらの都市国家の体制がかつては比類ない繁栄を享受していたことを私は以前から聞き知っていたが，（中略）その名声も事実それ自体には遙かに及ばないようだ。最初の一瞥においてさえ既に，これらの国の崇高な壮麗さはかくも偉大で，諸事情はかくも幸福であった。よって私はこれらの都市に数日留まることにした（p. 5）。

読者は恐らく16世紀の人物であるシュティブリンがアルザス地方の小都市においてギリシャ古典を観賞し，プラトンやアリストテレスによる理想的都市国家像を眺めている，つまり省察しているのだと考えつつこの旅行記を読み始めるだろう。が，いつの間にか主人公が時間的にも空間的にも移動し

てかつてギリシャの哲人達が理想国家として描いた共同体に身を置いていることに気づかされる。ところがそれもつかの間，シュティブリンはやはり輝かしい評判となっていたマカリア島とその首都エウダイモンに心惹かれ，さらに太洋の東方を目指して船旅を続けるのである。船は嵐に見舞われて難破しかかるが運良くマカリア島に漂着し，シュティブリンは14日間エウダイモン市に滞在する。その間人々に歓待され，彼らと意見を交わし，この国の政情について学ぶ。それは自らが住むドイツの惨状と較べると「幸福な国家の完璧なる模範」のような世界であった。シュティブリンはドイツ社会の憂う

マカリア島の見取り図：著者自身のスケッチとあるが、本文の説明を忠実に反映しているわけではない。

べき欠点と比較しながら，その名も〝幸福〟のエウダイモンに関する素描を始める。

3－2．エウダイモンのトポグラフィー

マカリア島は多くのユートピアがそうであるように，大海に浮かぶ孤島である。その形状は円形，標高は高く，風向に恵まれ気候は温暖で，その極めて肥沃な土地はおよそ人間が必要とするものを全て提供することができる。首都であるエウダイモンは島の中央に位置し，東西南北に4つの門を持つ環状の防壁に保護されている。市内には他にも防壁と同心円を成す二重の隔壁があり，水を湛えた堀がそれぞれに平行して張り巡らされている。市の中央から街路が放射線状に走っており，環状道路と交差している。市内の建築物の豪華さ，壮麗さは筆舌に尽くし難いほどであるが，中でも最も豪奢なのは市の中央の高台に建つ官庁舎と教育機関のコレギウム（collegium）で，それは建築の粋を集めた王宮のような建物である（p.85）。建物の外壁・内壁には寓話や歴史的事実を題材とした壁画や韻文が多く描かれ，見る者がそこから教訓を学び，高い志を持つよう配慮されている。

一般市民の住居用建築も壮麗で，万一の擾乱や戦争に備えた兵站学的見知から余裕のある空間配置がなされている。エウダイモンの周囲には豊かな葡萄畑が広がっており，おそよ果樹には恵まれている。防壁の門を出てからは一日の行程で海岸に達するが，エウダイモン以外の都市に関する言及はなく，エウダイモンはマカリア島唯一の都市国家である。

3－3．国家の倫理的・宗教的理念

エウダイモンの住民は，かつて野山で原始的な生活を営んでいた自分たちが共同体として集まり，現在のような洗練された生活形態に至ったのは偶然ではなくて神の意志によるものであると信じている。よって，人体においては多くの部位が集まって一つの身体を成し，それぞれの部位が統一体である身体の健康維持を目的として機能しているように[19]，共同体においては全体

の繁栄と安寧こそが住民皆の最大の関心事であると彼らは考えている。神はこの共同体を喜び，絶滅からそれを護っているが，共同体の規則を犯す者，国家に反し不正を犯す者があれば重い罰が下される。

また，人間は神の似姿であり[20]，そのことが人間にとっての〝自然〟であるから，徳の完璧な手本である神の次元に近づくよう努めない者は自らの自然に反しているのであり，不道徳によって神聖なものであるべき自分を汚すことはエウダイモン人にとって最大の悪である。エウダイモン人の考える幸福とは正義，貞節，敬虔さといった徳を保持し，恥ずべきことを遠ざけることにあり，生活習慣の総てがこの目的に適うよう営まれている（p.11)。

3－4．政治形態

およそユートピアが真に理想郷的であるかどうかはその政治的状況に大きく左右されるはずであるが，ユートピアでは民衆は決定権を持たず，政治的エリートのみが決定権を持つ場合が多い。エウダイモンも例外ではなく，その政治体制は元老院（senatus）が治める貴族共和制である。元老院議員は大変な名誉を伴う職務で，新議員は学識，聡明さ，高潔さにおいて秀でた男性たちの中から現元老院議員によって選ばれる。政府は元老院と行政府（magistratus）とから成り，行政府の官吏もまた貴族のグループであるオプティマティス（optimaties）[21]によって選ばれ任命される。これらの指導者たちは立法，司法，国防，社会福祉，道徳の保護，学問の育成，交易等に責任を持ち，法案は元老院での決定後に民衆に告示されて民衆の合意を得ることになっている（p.49)。しかしかくも人々の尊敬と信望を集める元老院の決定は神の言葉にも等しく（p.19)，民衆が法案を拒否する可能性は皆無に等しい。行政府の責任も大きく，人々は国家における行政府の役割を，身体にとっての眼，ま

---

19 プラトン『国家』462 c-d に同様の比喩が使われている。
20 プラトン『国家』501 b に同様の記述が見られる。
21 〝オプティマティス〟に関するシュティブリンの詳細な説明はない。

た天空における太陽のそれに等しいと見なしているかのようである (p.21)。しかし同時に指導者が舵取りを誤った場合に国家を待ち受ける悲劇についても十分に意識されており，その運命は「岩礁に乗り上げた船」や「谷に落ち行く馬車」などのモチーフを使った壁画として官庁舎に描かれ[22]，それらの壁画は何らかの過失によって正義と真理の道を踏み外すことがないよう指導者たちに警告を与えている(p.23)。民衆は政府の組織に無関係であるとは言え，エウダイモン人は生まれつき賢明さを具えているように見え，国家に対しては常に才能と忠誠と献身とを捧げるという心構えで暮らしている (p.19)。

3－5．身分制度

この見聞記において恐らく最も興味深い事象の一つが身分制度であろう。例えばシュティブリンは,「身体にも様々な部位があるように人々にも多様な違いがある」とし，「洞察が得られる者と得られない者」という能力の違いを例に，平民 (plebeia) と貴族 (patricia) という二つの階級の存在を説明する (p.15)。さらに，個人の名誉と名声は国に対するその個人の貢献度と賢明さ，高潔さが決めるとし，個人の能力によって所属階級が決まるとしている。また，低い出自から自らの徳の高さによって指導者の地位に就く者が最も尊敬されているという。一部で祖先の偉業によって代々名望を保つ名家の存在も認められてはいるが，彼らもその家名に見合うだけの資質を証明しなくてはならないので (p.17)，エウダイモンの社会はどうやら能力主義的平等主義社会とでも呼べそうである。しかも人々は他人を見下したり嫉妬したり，また高慢になったりすることなく，円満に暮らしていると言われる。

他方，一度地位と名誉の階級が決まると名誉の軽視や中傷，理由のない不遜は極めて恥ずべきこととされ，社会秩序の安定が強く求められている。また能力とは国家に対する貢献度や有用性とほぼ等しく，能力主義の裏にはテ

---

[22] 両方ともプラトンの作品に見られる国の舵取りの比喩である。『国家』488,『ポリティコス』266 e。

クノクラシー的な全体主義的側面も覗いて見えたりする。しかも国に奉仕した者，戦争で武功を立てた者には幸福な年金生活が待っている（p.79)。

このような身分制度との際だった対称において語られるのがドイツの現状である。シュティブリンによると，そこでは土地も職務も金持ちに分配され，下位の者はどんなに優秀でも名誉ある地位に授かる可能性がない。司法や行政の場で指導的な地位を占めているのは経験も知恵も持ち合わせぬ俗物や破廉恥漢である (p.25)。エウダイモン人たちを驚かせながらシュティブリンが語るドイツの現状は，このように対立像として頻繁に『見聞記』に登場する。

3－6．反民主主義と家父長主義

実はエウダイモンの政治体制は極めて反民主主義的，またその社会は明らかに家父長主義的である。指導者たちの考えによると，民衆は情動と欲望に突き動かされるので適切に物事の判断を下すことができず，学識に富み志操堅固な男性たちによって治められる国家のみがみ安定して堅固なのである (p.19)。国家の基盤を危うくする叛乱は未然に防止されねばならず，集会は個人的なものであっても禁止されており，反国家的行為は死刑を以て罰せられる（p.49)。

一方，指導者たちはほとんど神的な領域に達するまでに自らの徳を高めようと努力し (p.27)，プラトンによる哲人統治の思想[23]がエウダイモン人の間にも広く浸透している。したがって哲学は国家統治に関する知識の泉，総ての倫理的規範の源であるとされ(p.37)，子供たちは幼少の頃からこれを学ぶ。因みに指導者たちは言うに及ばず，教師も総て男性であるとされ，コレギウムでの教育も特に性に関する言及はないが，目的がエリートの養成であることを考えれば女性の教育は念頭に置かれていないことは明らかである。ほぼ男女同権であり，女性の司祭も存在し得るモアのユートピア国とはここで明らかな違いを見せている。

---

[23] プラトン『国家』473 d-e。

3－7．教育と芸術

エウダイモン人にとっては国の宝,国家の柱とも言うべきものが二つあり，一つは人々の弁舌能力，そして学問的修業である。彼らは教育とその機関であるコレギウムのためには支出を惜しまない。コレギウムにはギリシャ・ラテン文学に通暁した最高の男性教師陣が集められ，子供たちはまず二つの古典語の学習から始まって哲学，修辞学，算数，幾何学，天文学を学ぶ。また芸術科目としては詩学と音楽が教えられ，さらに神学，医学，法学が言わば発展的科目として教授される。科目に関しては中世におけるヨーロッパの学問的伝統と違いはないが，エウダイモンにおける教育の特徴は，学問的能力として雄弁さ,つまり言語運用能力を最も重要視している点である。シュティブリンの説明によると，人間はその最も高貴な部分である理性と言語能力を以てのみ動物から分かたれるのであり，人間がこの天賦の特性を磨いて正しく活用しなければ再び無知蒙昧の状態に陥ってしまう。また言語使用が思考や行為の総てを規定するのであるから，義務の遂行や行動において優秀であろうとすれば自ずと言語能力に秀でていなければならない。このようなアリストテレス的，スコラ哲学的考えによって，コレギウムでは最初の学年からプラトン，プルタルコス，アリストテレスといった思想家の作品が教材として与えられる。しかし教育の目的は純粋な学問の深化よりも公民としての政治的能力の育成にあり[24]，学年を追うごとに哲学より修辞学の重要度が増してキケロ，デモステネス，クインティリアヌスらの修辞家を模範とした弁論や討論の訓練が施されるようになる。シュティブリンの観察によると，〝彼らはこのようにして公僕としての職務に向けて準備する。そうすれば彼らの余暇が過度に学問に捧げられてその魂が軟化したり男性らしさを失ったりするといったことは起こらないのである（p.37)〟。

また，彼らの芸術教育にも合目的性があり，楽興の時には魂の力と精神を

---

[24] コレギウムは国家的義務の遂行に適した人材を輩出するための工房であるとされる（p.45)。

鼓舞する旋律や歌のみが選ばれる。音楽は華美である必要はなく，楽器の改善といった音楽の刷新は許容されないばかりか[25]罰を受ける可能性さえある。それでもエウダイモン人は殆ど皆がミューズの神と親しい関係にあり，異邦人のシュティブリンをその点における自分たちの同類と見て厚遇するのである（p. 9）。

3－8．宗教・神学・教会

敬神はエウダイモン人にとってあらゆる目的の頂点である。そしてエウダイモンには宗教・教会・神学に関する意見の相違は存在しない（p.71）。そこにあるのはカトリックの信仰に裏打ちされた極めて均質的な宗教社会である。まずコレギウムには学校の宝とも言うべき3人の神学者がおり，ギリシャ語，ラテン語，ヘブライ語の知識を駆使して原典に忠実に聖書の解釈を行っている。彼らは見解の多様性によってこの宗教の真摯さが損なわれるのを許容しない（p.43）。また教会の神父たちはキリストの真似びに倣って生活し，あらゆる堕落とは無縁である。彼らは信者たちが敬神を疎かにしないよう常に気を配り，彼らの信仰心の番人の役割を果たしている（p.73）。また，宗教の問題に判断を下すことは平信徒には許されず，教会の方針に反することを口にする者，神を冒涜する者は公序良俗の破壊者として舌を抜かれるか[26]国家追放，場合によっては死刑の罰を受ける[27]。一人の罪が町全体を不浄にするので，神の罰が下る前に涜神の罪人は追放されねばならないからである（p. 61）。しかしそのような例は希であり，大抵のエウダイモン人は熱心な指導者たちに導かれ，偽善もカトリックの教義からの逸脱も知らず，純粋で真摯か

---

[25] プラトン『国家』（405 A）。

[26] これは16世紀当時実際に行われた刑罰で，フライブルクには1537年にこの刑の記録が存在する。が，普通は共同体からの追放という罰が適用された。『見聞記』に登場する刑罰は，16世紀におけるドイツの刑法の実状に合致している。Jahn, ibid., p.102.

[27] 16世紀の刑法ではこのような罪の罰は死刑であった。特にアルザス，ストラスブールでの罰は厳しかった。Jahn, ibid., p.105.

つ誠実な生活を送っている（p.71）。

一方でシュティブリンが住む世界では聖職者たちが堕落し，平信徒が勝手な口を聞き，教義に関する論争が絶えない。エウダイモン人たちはそれを聞いて驚き，神の教えは誰にとっても明らかであるのになぜ多くの宗派や混乱があるのだろうと訝しがる。それに対しシュティブリンは，「聖職者たちは私服を肥やすのに忙しく，秩序の維持には無関心である。またどんなろくでなしでも宗教に関して決定を下す自由があり，公会議の決定や権威に関心を向ける者などほとんどいないと」と言って嘆くのである（p.75）。

3－9．市民生活と刑罰

中庸を守った暮らしにより健康で長寿を全うするとされているエウダイモン人であるが（p.53），彼らの日常生活については断片的な描写があるのみである。例えば私有財産は認められているが富の蓄積に心を砕く者は非難を受ける（p.11）。コレギウムに寮はなく，子供たちは家庭で作法や道徳を教えられる。生活は質素で，衣服はそれぞれの役割（元老，貴族，平民，母親，未婚女性等）によって定められている（p.67）[28]。外界からの悪影響を防ぐために貿易が制限され，旅行も禁止されているので人々が遠きを思って無価値なものに焦がれることはない（p.65）。人々は持てる物に満足して暮らすので，経済活動も必要最小限に限られ，穀物の値段も規定されている（p.75）[29]。そもそも浪費や贅沢が大罪とされ，国家の転覆も浪費から発するとされるほど[30]共同体にとっての大きな脅威と考えられている（p.49）。その他罰を受けるのは姦通する者，暴飲する者，不信心者，卑猥な発言をする者，守銭奴，

---

[28] 当時の社会では衣服の規則違反には罰金が課せられたが，違反も多く行われていた。Jahn, ibid., p.105.

[29] これは古典語学者たちの経済問題に対する無理解から来る設定ではなく，16世紀普通に行われていた当局による穀物の価格統制を意味している。Jahn, ibid., p. 105.

[30] プラトンの『国家』においても，「贅沢」が領土の必要性から国家が戦争へ突入する時の原因とされている。『国家』372 e-373.

浪費家，学業を厭う者などで，「エウダイモンはそのような人間の屑を許容せず，有害なペストのごとく国家から追放する（p.25）。」また盗賊は絞首刑[31]，殺人，誹謗中傷，放火なども重罪で，国外追放か死刑を宣告される（p.75）。

が，エウダイモンのおける最大の罪は国家転覆罪である。そもそも刷新や改革的試みも厳しく罰せられる。革新は内面的不安の根源であり，変化に対する欲望が何ら良いことをもたらさないことをエウダイモン人たちは歴史から学んでいるので，彼らは前例や伝統に従って生きることを好む。公益に適うことが証明されない限り変化を求める試みは厳しく罰せられる（p.47）。また，子供たちを父親の子供時代と同様の方法で育てることに同意できない者は市民権を奪われる（p.65）。

「どれ程エウダイモン人は我々より幸せなことだろう？」とシュティブリンは自らの住む世界を省みて嘆く。ドイツでは天地を逆にすることさえ許される。次々と破壊と変革が繰り返されるので，法律も指導者も権威を失い悪徳が蔓延っている（p.47）。また放埒と外国かぶれが手に手を取って横行し，伝統的な知識や技能を見下すので，ドイツ固有の秩序や規律は失われていくばかりである（p.67）。一方エウダイモンではかつてのスパルタのような規律が生きているので，放埒も怠惰も許されない。休日でも人々は何らかの競技会を催して向上のための努力を奨励している（p.17）。またエウダイモン人は自分の身の回りの風紀や作法の乱れを少しでも見逃さず，互いに行動を修正し合うか行政官の指導に委ねる。そのことによって悪を芽のうちから摘むことに成功しているのである（p.21）。自分たちの世界にこのような社会の修正機能があればどれだけよかったか，しかし今となっては手遅れである，とシュティブリンは嘆いている（p.63）。

3-10．国防

「平和は幸福の母，国家の花，戦争はあらゆる不幸が大海となって押し寄せ

---

[31] 当時絞首刑は断頭台による死刑より重い刑であった。Jahn, ibid., p.105.

るのに似ている（p.79）」が，必要とあらばエウダイモン人は兵士となり皆が祖国のために喜んで死ぬ準備がある。国家は防壁と要塞によって厚く保護され，防衛体制も万全である。武装準備も申し分ないので戦争はいつも勝利に終わる。しかし何よりもエウダイモン人は神の加護を信じているのであり，神に祈ることが何よりも先決とされる（p.81）。

4．ルネサンス期の人文主義的ユートピア

以上のようなことを見聞きした後，シュティブリンは再び太洋を渡って帰国するのであるが，現代の読者がこの見聞記を読めば恐らく果たしてこれがユートピアだろうかと自問することだろう。読後の印象として残るのは，エウダイモンの集団主義的・全体主義的勤勉さ，宗教的非寛容，刑罰の厳しさ，禁欲的な暮らしであり，生活の豊かさや快適さではなかろうからである。『エウダイモン国見聞記』の発見者とも言うべきフィルポは，シュティブリンの理想国家論を「宗教的幻想である。加えてその貴族主義的・スパルタ的生活規律の経済的観点は初歩的で，独創性と批判的・社会的モデルとしての大胆さに欠ける」[32] と手厳しく評している。しかしながら，フィルポの観点から見るシュティブリンはやはり正統なユートピストなのである。

ある架空の社会をユートピアと呼び得るかどうかを判断するための〝ユートピアの定義〟はこれまで多く試みられており，どれも似かよってはいるが，例えばヤーンは序文の中でディルク・オットーによる定義を紹介し，エウダイモンがユートピアとしての条件に十分に合致していると説いている。オットーによるユートピアの条件は，1．フィクションであること／2．実現可能性がないこと／3．理性的な構築物であること／4．理想的な共同体であること／5．現実批判として構想されていること／6．地理的・時間的な遠

[32] Seibt, Ferdinant, Utopica: Modelle totaler Sozialplanung, Düsseldorf, 1972, p. 105.

隔性があること，という6項目であるが[33]，実はエウダイモンは特にルネサンス期のユートピアとしての特徴をもほとんど総て具えているのである。

ルネサンス期の人文主義者たちの特徴として挙げられるのは，例えばギリシャ・ローマ時代への回帰願望，自然に対する宥和的な姿勢，理性への信頼，文献学の重視，エラスムスに代表される福音主義などであるが，J.プリュスがエウダイモンを「プラトン以来最も学問を重視した」[34] 理想国家と呼んだように，古典主義的な悟性主義，神と自然と理性の言わば三位一体的な関係付け，福音に対する原典主義など，そのルネサンス的な特徴は際立っている。また，ジャン・セルヴィエの整理法に従ってルネサンス期のユートピアの性格を考察するとすれば，例えば正義の法の確立（共同体における制約の存在を明確にすること），個人の共同体への適合（自分が所属する共同体の理念を理想とし，自分がその理想にとって有益であろうとすること），明確な政治機構の存在（支配者と非支配者との間に平等と和解を暗示し，階級闘争の問題を解決すること），外界から隔離された安全な世界であること，等をその特徴として挙げることができる。どれもエウダイモンに備わっている特徴である。「こうして千年王国運動と深刻な宗教的危機が最高潮に達するにも拘わらず，ルネサンスは，都市計画へ，プラトン的都市という昔ながらのテーマへと回帰するのである。」[35] とセルヴィエは言う。しかし古典的な理想都市国家への回帰と，過激な改革運動および宗教的対立は，ただ平行して存在するのではない。旧教徒にとってのユートピアであるというエウダイモン固有の特徴と「当時の社会的状況とユートピア構想の間にはどのような連関があるか」[36] という

---

[33] Otto, Dirk, Das utopische Staatsmodell von Platons Politeia aus der Sicht von Orwells Nineteen Eighty-Four, Berlin, 1994, p.144ff.

[34] Prÿs, Joseph, Der Staatsroman des 16. und 17. Jahrhunderts und sein Erziehungsideal, Würzburg, 1913, p.77.

[35] ジャン・セルヴィエ『ユートピアの歴史』朝倉剛・篠田浩一郎訳，筑摩書房，1972，p.125.

[36] Vogler, Günter, Von Eberlin zu Stiblinus.—Utopisches Denken zwischen 1521 und 1555, in: Siegfried Hoyer (Hrg.), Reform, Reformation, Revolution, Leipzig, 1980, p.144.

ギュンター・フォーグラーのもっともな問題設定に踏み込んで考えてみると，むしろ騒擾と深刻な宗教的危機ゆえにシュティブリンのプラトン的回帰があった，と言うべきなのである。

5．反宗教改革時代のユートピア

カスパール・シュティブリンが生まれたのは1526年である。その前年に農民戦争は敗北によってその最も激烈な時期を終了しているが，彼が生まれたアルゴイ地方と学生生活を送ったフライブルク近辺，また『見聞記』を書いたシュレットシュタットは，それぞれ個別の農民一揆であるブントシュー一揆が起こった土地でもあった。キッツラーの言うようにシュティブリンが農民戦争の余韻の中で成長したとすれば[37]，新教派の改革の熱狂が千年王国運動など別の形態を取り，1534年にはミュンスターにおける再洗礼派の擾乱が起きていることに着目しなければならない。また諸侯同志の反目に目を向ければ1545年から1547年にかけて新教派討伐のためのシュマルカルデン戦争が起きている。このような少年期の雰囲気の中で，貧しい家庭出身で学業に秀でたシュティブリンが自己実現の可能性としてキッツラーの言う「学者たちのユートピア（Gelehrtenutopie）」[38]を夢想したとしても不思議はなかろう。しかも旧教徒で帝国派の彼は勤務先のシュレットシュタットでもヴュルツブルクでも，カトリックの教義に沿う教育実践の要請を受けていた。そして『見聞記』が出版された年である1555年は，アウクスブルクの和議が成立した年，つまり帝国の宗教的一体性が失われた年であり，換言すれば反宗教改革が本格的に始まった年でもある。

モアの友人エラスムスが晩年を過ごした地であるバーゼルとの知的な結び

---

[37] Kytzler, Bernhard, Stiblins Seligland, in: Literarische Utopie-Entwürfe, Hiltrud Gnüg (Hrsg.), Frankfurt am Main, 1982. p.98.

[38] Kytzler, Stiblins ‚Coropaedia‘, p.83.

つきから，シュティブリンは『ユートピア』の存在によって創作の刺激を受けたと推測されるが，理念的にはモアの影響は少なく[39]，ユーモアや快活さにも乏しい。しかしモアとの比較において『見聞記』を反民主的で宗教的に非寛容なユートピアとしてのみ同定する前に，ドイツにおける〝改革文書(Reformschrift)〟の系譜上において『見聞記』を眺めてみる必要があろう。

ドイツには農奴解放運動の時代から，有志が社会改革案を提示した改革文書を配布する伝統がある。農奴解放を要求した15世紀半ばの「ズィギスムントの改革(Reformatio Sigismundi)」，貴族制の廃止を説いた「上ライン地方の革命家(Der Oberrheinische Revolutionär)」などである。また，ルター派の説教師，エバーリン・フォン・ギュンツブルク(Eberlin von Günzburg)の「ヴォルファリア(Wolfaria)」(1521)や著者不明の「キリスト教徒の生活の新たな変化について(Von der newen wandlung eines Christlichen Lebens)」(1526／27)などにはユートピア的要素が多くあり，前者はモアの『ユートピア』の影響下で書かれたと言われている[40]。カトリック教会批判や職能による身分制度の導入要求など，それぞれ説くところは異なるが，概ね共通している点は，社会の平等化，民主化要求である。階級闘争を鼓舞するこれらの改革文書の要求は『エウダイモン国見聞記』のそれと較べるとかなり過激であったりする。『見聞記』においてシュティブリンが何らかの階級差を設定しつつも階級間の宥和策を提供しようとする姿勢や，礼節や秩序に対して見せる偏向は，カール・マンハイムの言うユートピア的な意識の段階的変遷という時間軸[41]において捉えてみると納得のいく現象である。マンハイムの分類に従えば，シュティブリンの『見聞記』におけるユートピア思想は，千年王国論の後に訪れる自由主義的・人文主義的観念の段階と，その後の保守的な観念の段階との間に位置するものとして捉えることができる。そこに

---

[39] Kytzler, Stiblins Seligland, p.93.
[40] Vogler, ibid., p.144.
[41] カール・マンハイム『イデオロギーとユートピア』鈴木二郎訳，未来社，1968，p.220 ff。

描かれているのは，革命的かつ熱狂的ではあるが矛盾を孕んだ千年王国運動を経て現れる合理的なユートピアである。現世における何かの突破口を確保するためと言うよりむしろ「邪悪」な現実に対抗する「正しい」合理的な反対像の提示であり，具体的な出来事を取り扱う場合の「基準」の強化，つまり「規整」の動きに過ぎない。と同時に，現実の安定を目指す心的エネルギーから発しながらも，下層・中間層が貴族階級などの旧体制側に対して合理性と倫理性によって意識的に自らを正当化しようとする点においては自由主義的・解放的な側面も併せ持つ。が，その改革意識が自らの属する社会層の現実秩序を脅かす新興勢力への対抗意識によって主に方向付けられ，自己防御手段として役立つ反対ユートピアを生み出させている点において，エウダイモンは保守的な観念の段階におけるユートピアの典型であるとも言えるのである。

また，セルヴィエに倣い，ユートピアとは「補償的な夢のすべての誘惑によって飾られた，一社会階級の諸々の渇望の表現であり，輝く都市は，科学や技術の進歩が，これまで都市を苦しめてきた諸世紀の災禍，戦争，飢饉，失業ないしは過酷な賦役から特権的人間を守ってくれる，閉ざされた社会なのである[42]」とするなら，シュティブリンのユートピアは，農民戦争及び千年王国運動と反宗教改革という二種の歴史的出来事の間に旧教徒かつ人文主義者として教育を受けた下層階級出身の少年の，安寧と秩序を求める夢であるとも言える。同様に夢の表現ではあっても文学作品としての形式を持たない千年王国論的観念段階の改革文書とは異なり，シュティブリンは完成された作品として『見聞記』を提示し得た点において，やはりドイツ最初のユートピストという名誉に値するのであろうし，また『見聞記』は，本格的な反宗教改革の時代を迎えようとするドイツの一社会階級の夢ではあるのだが，それ以前の改革の夢の提示という伝統の枠組みにおいて読まれねばならない作品であるとも言うべきであろう。

---

[42] セルヴィエ，同上，p.126。

その他の参考文献

- Annelore Franke und Gerhard Zschäbitz, Das Buch der hundert Kapitel und der vierzig Statuten des sogenannten Oberrheinischen Revolutionärs, Berlin, 1967.
- 阿部謹也「Reformatio Sigismundi 研究への一視角」in：社会経済史学会「社会経済史学」34巻4号，1968。
- Holborn, Hajo, Deutsche Geschichte in der Neuzeit, München: Oldenburg, 1970.
- 川端香男理『ユートピアの幻想』潮出版社，1971。
- M・L・ベルネリ『ユートピアの思想史』手塚宏一・広川隆一訳，太平出版社，1972。
- 高柳俊一『ユートピアと都市』産業能率短大出版部，1975。
- 澤田昭夫監修『『ユートピア』── 歴史・文学・社会思想 ──』荒竹出版，1976。
- 澤井繁男『ユートピアの憂鬱』海鳴社，1985。
- Kytzler, Bernhard, Zur neulateinischen Utopie, in: Utopieforschung II, Wilhelm Voßkamp (Hrsg.), Frankfurt am Main, 1985.
- ジル・ラプージュ『ユートピアと文明』中村弓子他訳，紀伊国屋書店，1988。
- Braungart, Wolfgang, Die Kunst der Utopie: vom Späthumanismus zur frühen Aufklarung, Stuttgart, 1989.
- 井口正俊／岩尾龍太郎編『異世界・ユートピア・物語』九州大学出版会，2001。
- von Günzburg, Johann Eberlin, Sämtliche Schriften, Halle, 1900-1902.

Eine Utopie der Gegenreformationszeit

—— Kasper Stiblins „Kurzer Bericht über den Staat der Eudaimonenser" ——

Miyuki SOEJIMA

1553 schrieb ein junger Humanist im Elsass einen fiktiven Reisebericht mit dem Titel „*Commentariolus de Eudaemonensium Republica (Kurzer Bericht über den Staat der Eudaimonenser)*". „Eudaimon" (εὐδαίμων = glücklich) ist die Hauptstadt der Insel „Makaria" (μακαρία = die Seligen), deren Volk „Makarenser" schon Thomas Morus als Bewohner einer Nachbarinsel von Utopia erwähnt. Nach dem Berichterstatter ist die Verfassung in Eudaimon ein „vollkommenes Vorbild eines glücklichen Staates", „dem die übrigen Staaten nacheifern" sollen.

Dieser Bericht erschien 1555 als Büchlein in Basel und der Verfasser, Kaspar Stiblin (Caspar Stiblinus) (1526-1563), war ein in Freiburg ausgebildeter Philologe und war damals Lateinlehrer in einer Humanistenschule in Schlettstadt. Stiblins größtes Werk war die Übersetzung sämtlicher Tragödien des Euripides in die lateinische Sprache, die 1562 auch in Basel erschien. Dieses Unterfangen wurde aber zweitrangig durch die im selben Jahr erfolgte Neuauflage von Melanchtons Euripidesübersetzung und Stiblins Existenz geriet mitsamt seinen Werken in die Vergessenheit, bis 1959 Luigi Firpo, ein italienischer Polit-Philologe, seinen Bericht über Eudaimonenser wiederentdeckte und ihn in die Chronologie der utopischen Literatur platzierte. Da begegnete ein kleiner Gelehrtenkreis der ersten deutschen Utopie, während der Ruf, der erste deutsche Utopist zu sein, im allgemeinen Johann Valentin Andreae zugesprochen wird, dessen utopische Schrift *Christianpolis* 1619 erschien, denn es war erst 1993, dass

Stiblins kleine Fiktion ins Deutsche übersetzt und auch einem ‚lateinlosen Leser' zugänglich wurde.

Man könnte wahrscheinlich Gründe dafür nennen, warum Stiblins Utopie, die erste Folgeschrift des berühmten Büchleins von Morus, so lange unbekannt blieb. Ähnlich wie bei Andreaes *Christianopolis* wird man zu Recht Mangel an Humor vorwerfen, denn besonders heutigen Lesern wird die Eudaimonenser Gesellschaft wenig ansprechend erscheinen, in der keine Abweichung von der katholischen Lehre toleriert wird, Gottlose, Aufsässige und Umstürzler aus dem Staat vertrieben werden, Neuerungen und Innovationen als die Wurzeln innerer Unruhe verpönt sind, und Luxus und Faulheit schwer bestraft werden. Öffentliche und private Versammlungen und das Reisen sind auch verboten. Die Regierungsform ist oligarchisch, wobei der aus Patriziern ausgewählte Senat und der Magistrat den Staat steuern. Es handelt sich dabei jedoch um keinen Blutadel, sondern Adel aus Tugend. Jeder, der sich um den Staat verdient macht und sich durch Klugheit und Tugend auszeichnet, verschafft sich das Ansehen eines Patriziers. Das Studium der Wissenschaften ist deshalb äußerst wichtig, weil durch die Erziehung alleine die Steuermänner des Staates ausgebildet werden können und nur Philosophen zur Herrschaft gelangen sollen. Tugend und Verstand sind die erhabensten Gaben Gottes, da ein Mensch das Abbild göttlicher Natur ist. Nach dem Vorbild Gottes und gemäß der Natur zu leben ist der Gipfel und das Ziel aller Dinge.

Stiblins Utopie hat einen Januskopf. Sie zeigt typische Charakterzüge vom humanistischen Idealismus, z.B. Idealisierung der Antike, Vertrauen in den Verstand und Versöhnungsversuch mit der Natur. Ihre konservativen, ordnungsfreudigen Züge postulieren im Lichte seiner gegenreformatorischen Idealität die Besserung der beklagenswerten

Realität der damaligen Gesellschaft, die durch religiöse und politische Unruhen stark belastet war. Nur eine Generation nach Reformation, Bauernkriegen, chiliastischen Bewegungen und dem Aufstand der Wieder täufer musste das Verlangen nach Frieden und einer egalitären Gesellschaft noch ganz 〈utopisch〉 wirken, aber auf der anderen Seite steht diese Utopie in der deutschen Tradition der Reformschrift, als deren Beispiele „Reformatio Sigismundi", „Oberrheinischer Revolutionär" und die Schriften des Eberlin von Günzburg zu nennen sind. Im Gegensatz zu diesen Flugschriften hat Stiblins Reformidee eine literarisch vollkommene Form und so gebührt es ihr, *prima eutopica teutonica* zu sein, doch soll sie m.E. in der Beziehung zu der damaligen gesellschaftlichen Situation gelesen werden, um ihr reformatorisches Postulat richtig verstehen zu können.